

令和2年度学校評価 結果

達成度(評価)	
A	: 十分達成できている
B	: おおむね達成できている
C	: やや不十分である
D	: 不十分である

学校名	みやき町立北茂安小学校
1 前年度 評価結果の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・学び合う力の育成に向けて、全職員共通理解のもと校内研究と運動させ北つこスタンダードの定着に努めた。その結果、12月の学習状況調査では、改善が傾向が見られた。 ・今後も、家庭との連携を強化し、取組を継続していく必要がある。 ・つながり合う心の育成に関しては、思いやる心や言葉遣いについて課題が見られる。 ・磨き合う生活の育成に関しては、食育の取り組みで朝食喫食率の改善の成果が見られたが、給食の残食率や偏食傾向には改善の余地がある。
2 学校教育目標	<p>未来を切り拓く北つ子 ～共に学び、共に感じ、共に生きる児童の育成～</p>
3 本年度の重点目標	<p>◎学び合う力、つながり合う心、磨き合う生活を育む。 ・北っこに役割を持たせ、出番を与え、認め、励ます教育活動の推進。</p>

4 重点取組内容・成果指標				中間評価	5 最終評価	主な担当者		
(1)共通評価項目				中間評価			達成度(評価)	実施結果
評価項目	重点取組	成果指標(数値目標)	具体的取組	進捗度(評価)	進捗状況と見通し			
●学力の向上	●全職員による共通理解と確実な実践	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師80%以上	・共通実践事項を学力向上対策評価シートマイプラン作成に生かし、朝の活動、授業、家庭学習と運動させ、学力向上に取り組む。	B	・授業時数確保や学習進度の調整を優先し、学力向上対策評価シートマイプランの活用は十分ではなかった。3学期の研修会で検討、確認を行う予定。「家庭学習がんばろう週間」の取り組みは家庭からも高評価を得ていた。話し合い等考えを交流する場面の制約はあったものの、各担任で工夫して行っていた。	A	・12月の県学習状況・学力テストでは、5・6年の国語以外は県の正答率に近いか上回る事ができた。記述問題を苦手としていたが、算数において度の学年も県の正答率を上回ることができた。学力向上対策研修会でも、指導改善に向けて様々な意見が出され、評価シートマイプラン作成の参考にすることができた。	野口
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○道徳に関するアンケートにおいて肯定的な回答をした児童70%以上	・授業後ふり返りの時間を設け、学習を通して考えたことや新たに分かったこと、これからの思いや課題について考えさせる。	B	・授業のふり返りとして、教材を通して自分が考えたことや、思ったこと、また、これからの自分に活かしていきたいことなどを考える時間を設けることができた。 ・ワークシートを活用し、残していくことで、いつでも自分の考えを振り返ることができるように工夫できた。	A	・授業のふり返りとして、教材や登場人物を通して自分が考えたことや、思ったこと、また、これからの自分に活かしていきたいことなどを考える活動を積み重ねることで、自他の生命を尊重や、他者への思いやり、社会性、倫理観や正義感などの気持ちをより育むことができた。道徳に関するアンケートでも肯定的な回答をした児童は、96%以上だった。	野田千
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○いじめ防止等(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対応等)について組織的対応ができていると回答した教員90%以上	・日常的な観察やアンケートの実施による早期発見。 ・ケース会議や生徒指導協議会による早期対応と共通実践。	B	・各担任が日常的に児童の観察を行い、必要に応じてアンケートを実施して対応している。 ・いじめの事案が発生したことを受けて、生徒指導協議会で全校での対応を話し合い、共通理解・共通実践を行った。	A	・各担任が日常的に児童の観察を行い、必要に応じてアンケートを実施し、早期発見に努めた。 ・いじめ防止等について組織的対応が、十分達成できた、概ね達成できた全職員が回答した。	重松、石井
●健康・体づくり	◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	◎「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童(6年生)80%以上	・将来や進路を見据え、必要な礼儀作法を身に付けさせるためにマナー検定(6年生)を実施する。	B	・将来や進路を見据え、必要な礼儀作法を身に付けさせるためにマナー検定(6年生)を実施することができた。 ・「夢の教室」・「なりたい自分になる学」などの取組を実施し、外部講師を招いて事例を学んだり、将来の自分について具体的に目標を立てたり、することができた。卒業に向けて、将来の自分について具体的に考えさせたい。	A	・将来や進路を見据え、必要な礼儀作法を身に付けさせるためにマナー検定(6年生)を実施することができた。 ・「夢の教室」・「なりたい自分になる学」などの取組を実施し、外部講師を招いて事例を学んだり、将来の自分について具体的に目標を立てたりすることができた。 ・国語や総合的な学習の時間に、小学校6年間を振り返り、これからの将来の自分が取り組むことについて具体的に考えることができた。	大家(6年担任)
	◎「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	◎「健康に食事は大切である」と考える児童90%以上	・食と健康に対する関心を高めるために、給食中の校内放送の栄養に関する話題を提供する。	B	・旬の食材と栄養について給食中の放送や掲示板で伝えている。11月のアンケートでは、放送をよく聞いている、元気に過ごすために食事は大切と思うと答えた児童が95%以上となっている。 ・野菜を苦手としている児童が多いので、今後も野菜を中心に栄養の話を続けていきたい。	A	・1月月のアンケートでは、放送をよく聞いている児童は95%、元気に過ごすために食事は大切と考えている児童は100%だった。 ・好き嫌いをせずに食べていると答えた児童も増え(11月67%、1月77%)、栄養の話等を通して苦手な食材も健康のために食べようという意識を持たせることができた。	鶴田中野
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・上限遵守のための時刻(午後7時)に確実に退勤、施設する。 ・毎月の時間外勤務時間の集計結果の報告。	B	・午後7時退勤に向け、30分前から職員へアナウンスをしている。上限を守る職員の意識は高まっているが、保護者連絡が絡む業務があると、放課後の学級事務の時間が割かれ退勤時刻が押し込まれることがある。 ・校内衛生委員会で時間外勤務の集計結果をもとに改善策の検討を行っている。紙媒体の職員への配布物の削減や会議時間の短縮等の地道な取組を続けていく。	B	・午後7時退勤の順守や定時退勤の実施について、職員の理解や実行への意識は十分に高まっている。その意識を実行に移すことができるよう、業務の効率化、削減、会議の内容の精選などにより、学級事務に専念できる時間の保証が課題である。	教頭
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目				中間評価		達成度(評価)	実施結果	主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標(数値目標)	具体的取組	進捗度(評価)	進捗状況と見通し			
○校内研究の充実	・プログラミング的思考を育む授業づくり(算数科を中心に)	・プログラミング的思考を育む授業実践を行った教員が95%以上	・講師招聘等によるプログラミング的思考を育む授業づくりに関する研修会の実施 ・月1回の校内研修の実施及び共通理解 ・授業研究会の実施	B	・鹿児島大学准教授山本朋弘先生を講師に招き、リモートによる研究授業参観及び授業研究会、研修会を各1回実施した。 ・スーパーティーチャー並びに研究主任が提案授業を実施し、研究に関わる共通理解を図った。 ・専門部、学年部、特別支援部ごとの研修会を実施し、授業作りや環境作りに関する共通理解の深化を図った。 ・各学年ごとに共通実践を行い、研究授業を実施。学年部及び参観者が参加する授業研究会を実施した。	A	・プログラミング的思考、児童の思考力・判断力・表現力との関係性について理論研修を行い、算数科の授業づくりについて、学年部ごとにめざす子どもの姿を設定し、各学年授業実践及び授業研究会を行うことができた。 ・フローチャート図で児童の思考過程を表し、児童がどのように考え、判断したのかを明らかにする取組ができた。 ・情報活用能力育成に関する年間指導計画を作成し、プログラミング教育に必要な情報活用能力について、一覧にまとめることができた。	吉田
5 総合評価・ 次年度への展望	<p>●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育</p> <p>・今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受け、教育活動に様々な制約を受けながら学校教育目標達成に向けて取り組みを行った。取り組みにあたっては、従来の方法では実施が困難と思われるものもあり、日時、形態、規模、内容を一から見直す必要があった。見直しにあたっては、取り組みの目的そのものを再確認し、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の対策を踏まえ、形態を模索した。状況に合った取り組みにするために、安易に前年度どおりでは済まず、運営委員会や職員会議の中で協議することとなった。話し合いのために時間を費やす結果となったが、その都度、全職員もしくは担当職員で、取り組みの目標を再確認することができた。その目標達成に向け、効率や効果を視点に、自分たちの教育活動を見直す機会になった。 ・次年度は、安易に従来どおりの取り組みを行うのではなく、それぞれの取り組みの目標を全職員で共有し、働き方改革を視野に入れながら学校教育目標の達成に向けた組織的な教育活動の展開を図っていききたい。</p>							